

学会の沈黙について

半世紀近くも経過すれば、学会も変貌するのはあたり前の話。永い沈滞のなかったことは、むしろ嘉すべきことかもしれない。

40余年も前といえば、それは戦後、間もなくの頃にあたり、今の働き手の誕生はその頃である。当時の学会について諸氏に実感のないのは当然のことである。

善し悪しの判断は会員諸公にまかせることにしよう。当時、学会の理事をつとめていた一老会員は、昨今、40余年の間の著しい変貌を感じる。一例をあげ、その経過をたどることにしよう。

場所は当時、高円寺にあった気象研究所であったと思う。1954年5月20日、日本気象学会は（ビキニの）水爆実験について、格調高い声明文を発表した。

これは学術会議の水爆禁止の声明（54年4月23日）を支持した上で、気象学的にも甚だ危険なことを訴えたものであった。学会の声明文の冒頭の一節を引用してみよう。

「広島と長崎で一瞬のうちに数十万の生命を犠牲にし、人類最初の原爆を体験したわれわれ日本人は、続いて行なわれたビキニ環礁水爆実験によって、第三回目の犠牲者を平和な漁業をいとむ同胞から出したのであります。

このことはわれわれに測り知れない衝撃を与え、同時に近代科学の成果である原子力をこのような破壊力として使うことに深い疑念を抱かせつつあります。」

今年（1995）の夏、フランスはタヒチのムルロア環礁で複数の核爆発実験を行った。これに対し中国の核爆発実験と共に、国民各層の抗議や反対運動が行なわれていることは衆知のことである。

これらの実験は、国は違いますがビキニの水爆実験の延長線上にあるものと思うが、気象学会はこれに対し、今回は沈黙を守っているように思われる。

現在、私は学会のアクティブ・メンバーでないから、そこには一老会員の不勉強による誤解があるかもしれ

ぬ。その場合、私は詫びねばならないが、学会誌や大阪での大会の様子をきく限りでは、改めてタヒチの核実験に対して抗議したといった話は聴いていない。学会の社会的機能は40年以上も昔の声明文につくされているから、現在は何も言う必要はないとでも言うのであろうか。

今年のノーベル平和賞は核兵器廃絶のためのバグウォッシュ会議（創設者ロートブラット）に与えられた。

そこに現在の核保有国を中心とした国際政治に対する1つの抵抗を感じ、その意義を高く評価した老ジャーナリストの話は私はいきしたが、これは詳細をわかまぬための大へんな誤解であると思う。

核兵器が人類全体を消滅させる潜在能力を持つがゆえに、それは絶対悪として反対したのがラッセル、アインシュタイン、湯川のバグウォッシュ第1回（1957）の確信であった。

それが第2回（1958）にはすでに必要悪という考えにかわり、ここからさらに核抑止論が生れ、この会議自身が核保有国の下請機関となってゆくのである。ソ連の水爆実験再開（1961）に対する湯川、朝永、坂田の声明を丸ごと握りつぶしてしまったのは前記ロートブラットであった（たとえば「週間金曜日」1995年10月27日号）。

第40回バグウォッシュ会議（1990、イギリス）では笹川財団や創価学会から寄付をうけ、今年の第45回（広島）では日本の原発関係から大口の寄付をうけている。

世界の学界も変貌しつつあると思う。それはノーベル平和賞によっても支持されたことなのだろうか。気象学会の沈黙が、このことを反映していなければ幸である。学会の基本方針にもかかわることと思うので、できれば拙稿に対する理事長自身の意見の開陳を望みたい。

（根本 順吉）